「ろくに」の意味と使用条件に関する考察

尚　暁歓

キーワード：副詞、ろくに、意味、使用条件

要　旨

本稿ではコーパス（BCCWJ）から収集した用例に基づいて「ろくに」の意味と使用条件について考察した。「ろくに」の基本義は「事態の内容が話し手の想定したところに達している」というふうに規定できる。この基本義によって、「ろくに…ない」が具体的な文脈においては、「数量未達成」「動作未達成」「状態未達成」の三つの発生義が生じる。この三つの発生義は排他的な関係にあるわけではなく、文脈によっては複数の解釈も可能である。「ろくに」が使用される文は①発話時には事態の状況が把握されている、②事態には少なくとも二つのあり方を持ちうる、といった二つの条件を満たす必要があり、また文の内容が主体の期待されるものでなければならない。

1. はじめに

本稿は、現代日本語における副詞「ろくに」の意味と使用上の特徴について論じる。「ろくに」については、それを否定形式と呼応する副詞の一つとして論じる研究がある（工藤(1999)）が、これに特化したものではないため、「ろくに」の意味に関してはまだはっきりしない所がある。また(1)が示すように、「ろくに」が使用可能な場合とその使用が不自然な場合が存在する。どのような時に「ろくに」の使用が（不）自然になるのか（以下「使用条件」）についても明確になっていない。本稿では「ろくに」の意味と使用条件を明かにすることを目的とする。「ろくに」と意味的にも形態的にも近似している「ろくな」「ろくろく」「ろくすっぽ（う）」などの表現は本稿では研究対象としない。

(1) a　ろくにノックしなかった。
　　b *明日事務室に行く際はろくにノックしない。

本稿の構成は以下の通りである。2 節では先行研究を概観し、その問題点を指摘する。同時に本稿のアプローチを説明する。3 節ではコーパスで行っている調査を説明する。これに基づいて、4 節では「ろくに」の意味について分析し、5 節では「ろくに」の使用条件について検討する。6 節では結論と今後の課題について述べる。

2. 先行研究と本研究のアプローチ

「ろくに」を直接に扱う先行研究は管見の限り工藤(1999)のみのようである。そのため、ここでは工藤(1999)と辞書の記述を見る。

工藤(1999)は「ろくに」を、その修飾先が動詞述語に限定されていて、「「頻度」あるいは「実現の量的側面」に関わる」（p.73）ものとして見ている。また、次の例を挙げて「ろくに」の意味を「量的不十分さ」（(2)）と「頻度的不十分さ」（(3)）の二つに分けている。しかし、「ろくに」は(4)や(5)のような、動作量や頻度を表すとは考えられない用法も存在する。

(2)　私がなにを聞いてもろくに返事もしません。　（工藤 1999:94、下線ママ）
(3)　おなじ建物にいながら二人はろくに顔もあわせる機会がなかったのである。
（工藤 1999:94, 下線ママ）
(4)　いざとなると僕はやっぱり、ろくに役に立たなかったのだ。
（雑誌「IN POCKET」2001 年第 5 号）[1]
(5)　だいたい説明書もろくにない。　（Yahoo!ブログ）

(4)は「ろくに」が「役に立つ」を修飾しているため、「ろくに」は量でも頻度でもないことが明かである。工藤(1999)では「ろくすっぽ記事の書き方も知らなかったのに」という文について、「この場合は程度にも関わるであろう」（p.94）と述べているが、「ろくに」にもこのような用法があることについては指摘がない。また(5)のよう

[1] 例文については、特に断りがない限り、下線は全部筆者が行ったものである。括弧内の情報は、BCCWJ における執筆者と書名／出典である。出典がない例文は作例である。

な物の数量を表す場合については、工藤（1999）では言及がなく、「実現の量的側面」が（2）のような「動作の量」以外に「物の数量」も含めているかは不明である。

また、辞書では「ろくに」ではなく「ろく」が見出し語として記述が為されている。その中、「ろく」が打消しの語を伴うという所に注目すると、「ろく（な・に）」の意味を「十分に、満足に」で説明している記述が多いことが分かる。例えば、『日本国語大辞典　第二版』と『広辞苑　第七版』『明鏡国語辞典　第三版』では「十分に」と「満足に」と説明している。『大辞林　第四版』『新明解国語辞典　第八版』『現代形容詞用法辞典』等では「十分に…ない」「満足に…ない」或いは「満足できない」「満足という状態から程遠い」のように述べている。

確かに「ろくに」が使用される文からは「十分でない」や「満足でない」の意味が読み取れるが、「ろくに」は「十分に」や「満足に」とまったく同じというわけではない。

(6)　サラ金の人は毎日やって来ては、子供たちから、ろくに残っていない家具や何やらを取り立てていったのだから。　（森泳『北のレクイエム』）

(6)の「ろくに」を「十分に」と「満足に」に置き換えると、文自体は成り立つが意味が変わってしまう。というのは、「ろくに」が表した「家具の数が非常に少ない」という意味が読み取れにくくなるからである。「十分に／満足に残っていない」なら「たくさん残っているが、必要とされる物が残っていない」という場合も考えられる。そのため、「ろくに」の意味を「十分に」や「満足に」だけで説明することについても検討する余地があると思われる。

これらの問題に対して、本稿ではまず調査範囲を広げて用例の収集を行う。豊富な用例に基づいて既存の意味記述を訂正し、補完する。その上で、「ろくに」が使用不可の場合を検討してその使用上の制限を明確にする。この一連の考察を通して、「ろくに」に対するより完全な記述を目指している（なお、例文の文法性について、「*」が非文、「??」がかなり不自然（非文に近い）、「?」が不自然、ということを指す。例文の文法性判断は日本語母語話者からの確認を受けている）。

3. 調査

工藤(1999)は新潮文庫に収められている 46 冊の文学作品から用例を採集したが、前述の(4)と(5)のような記述の漏れがあり、不十分である。本稿では現代日本語書き言葉均衡コーパス（以下 BCCWJ）を用いて用例の調査を行う。このコーパスはデータの代表性とデータの量が保証できるためである。

検索は BCCWJ を検索するツールである「中納言」を利用し、短単位検索で語彙素読みが「ロクニ」という条件で実施した[2]。その結果、484 例を検索することができた。誤解析と思われる 3 例を除いて、残りの 481 例を本稿の分析対象とする。

この 481 例を集計したものが表 1～表 3[3]である。以下、具体的に見る。

表 1　修飾先の品詞別出現数

品詞	用例数	割合
動詞	444	92.3%
形容詞（ない）	37	7.7%
合計	481	100%

表 2　修飾先の動詞の語形

語形	用例数	割合
基本形	238	52.5%
可能形	124	27.4%
テイル形	83	18.3%
受身形	8	1.8%
合計	453	100%

表 3　修飾先の出現数（10 位まで）

順位	修飾先	用例数	順位	修飾先	用例数
1	ない	37	6	読む	14
2	知る	21	7	話をする	12
3	見る	20	8	聞く・返事する	各 9
4	食べる	17	9	挨拶をする・覚える・眠る	各 8
5	口をきく	16	10	食う・喋る・仕事をする・寝る	各 7

表 1 から、「ろくに」の修飾先の特徴として、動詞が 444 例もあり、全体の 9 割を占めていることが挙げられる。また、非存在を表す「ない」も 37 例出現している。工藤(1999)では「ろくに」を動詞述語と共起する否定の副詞という部類に入れているが、

[2] 検索日: 2021 年 4 月 15 日。確認日: 2021 年 10 月 21 日。データバージョンが 2020.02 である。
[3] 「ろくに」が動詞を修飾する例文は 444 例であるが、表 2 の合計が 453 例となっている。これは動詞が二つの形をしている場合の 9 例（「可能形・テイル形」3 例、「受身形・テイル形」6 例）を二回に数えたためである。

これは「ろくに」の特徴を把握できているが、不完全である。修飾先が動詞の場合、表 2 のように、基本形で用いられる割合が高いが、可能形も全体の 1/3 弱で使用されている。表 3 の修飾先の出現数に注目すると、異なりでは「ない」が一番多く現れているが、人の意志的な動作を表す語、とくに発話に関わる動詞（句）（「口をきく」、「話をする」、「返事する」、「挨拶をする」、「喋る」）が多数出現していることが指摘できる。「ろくに」の修飾先全体を見ると、発話に関わる動詞（句）が 83 例も出ており、全体の約 17.3%を占めていることが分かる。

4. 「ろくに」の意味

本節は 3 節の調査で収集した用例に基づいて「ろくに」の意味を分析する。①「ろくに」には基本義があり、その基本義が具体的な使用場面において三つの発生義を持たせること、②「ろくに」の意味は解釈優位であり、場合によって複数の解釈を容認できること、③修飾先の内容がゼロに近いこと、の三つを論じる。

4.1 「ろくに」の基本義

本稿では「ろくに」が具体的な文脈に観察される意味より、もっと基本的な意味を持ち、この基本的な意味が実際の使用場面によって複数の現れを発達させたと主張する。基本的な意味を「基本義」、具体的な使用場面で読み取れた意味を「発生義」と呼ぶことにする。「ろくに」の基本義を次のように規定する。

(7)　「ろくに」の基本義：
事態の内容が話し手の想定したところに達している

上記の「話し手の想定」は具体的には「話し手が当然これくらいは…べきだと思う」ということを指す。例えば(1a)の「ろくにノックしなかった」は「話し手が当然これくらいはノックするべきだと思って」いるにもかかわらず、それがなされなかったという意味を表す。これに基づいて、「ろくに…ない」の基本義を「事態の内容が話し手の想定したところに達していない」というふうに提示できる。

以下、この基本義でコーパスから収集した用例の意味を全部説明できるということ示す。三つのタイプに分けて論じる。

4.2 「ろくに…ない」の発生義

4.2.1 数量未達成：対象数量少

修飾先の述語が（非）存在を表す「ない」、「いる」や所有を表す「持つ」、あるいは「残る」などの場合、「ろくに」は対象の数量的な側面を取り上げ、「ろくに…ない」が「対象が話し手の想定したほど存在していない」を表す。これを「対象数量少」と呼ぶことにする。

(8)　いや、本当に古本屋なんですよ。ろくに新刊本なんてなかった時代ですから。（雑誌『一冊の本』）

(9)　話し相手もろくにいないこの環境は、年頃の女の子にとっては少々キツイだろう。（岡田留奈『幻夢館』）

(10)　金なら奴はろくに持っておらぬに違いない。（ジョン・バース著／野崎孝訳『今は幻吉原のものがたり』）

(8)(9)(10)はそれぞれ新刊本、話し相手の数、そして金の量について述べている。「ろくに…ない」はその数量が話者の想定したくらいに存在した方が望ましいにもかかわらず、現実ではいずれもそれに達していないという意味を表す。また、これらの文においては対象が可算的であるが、「ろくに能力もない」や「応接室もろくにない」のような対象が非可算的な場合もある。この際、「ろくに」は抽象物の量や空間量を取り上げて修飾している。

4.2.2 動作未達成

続いて「ろくに…ない」が「動作が話し手の想定したほど為されていない」を表す場合である。この意味で使用されている文が三つのタイプの中で一番多い。修飾先は人間の意志的な動作を表す動作動詞、しかも「話す」「見る」「掃除をする」といった主体が動作を行うだけで、動作の結果を問わない動詞がほとんどである。この場合はさらに次のように二分して考察できる。

4.2.2.1 動作が多回的な場合

これは、動作が多回的に行われることが可能だという状況において、「ろくに」が使用されることによって、話し手にとってその動作の回数が少ないという意味を表す

場合である。これを「動作回数少」と呼ぶことにする。動作の対象が複数存在する時にこの意味が観察される。また、動作の主体や対象が一つだけの場合でも、動作の発生期間に一定の幅を付与する、あるいは「たことがない」のような文型が使用されているといった文脈条件が整えばこの意味も読み取れる。

(11) グレッグはチェスボードを見下ろして髪に指を突っこんだ。「まさか。まだろくに駒を動かしていないのに」
（ステファニー・ボンド著／佐々木真澄訳『素敵なコーヒーガール』）

(12) それによると彼は事件のあとも食事が喉を通らず、何日間もろくに食っていないという。（藤原晋也『空から恥が降る』）

(13) ラジオやテレビもあるにはあるが、ろくに聞いたことがない。
（開高健『戦後短編小説選』）

(11)はチェスで相手に王手をかけられた場面である。「ろくに駒を動かしていない」は「駒を動かす」回数が少ないことを表す。この時の多回という読みは対象（駒）が複数存在することによる。(12)は事件の影響で彼は食事をとることがだいぶ減っていることを述べている。「何日間」という時間幅が背景に設定され、「ろくに…ない」はその間に彼が食事をする回数が少なかったということを表している。(13)話し手がラジオやテレビを持っているにもかかわらず、それらを使用する回数が少ないという文である。「たことがない」という文型が用いられ、「聞く」ことの発生期間が発話時点までの長い時間となっている。(12)と(13)は動作の発生期間が長いため、事態の発生頻度が少ないという理解も可能である[4]。

4.2.2.2 動作が一回的な場合

[4] (11)と(12)では修飾先の動詞がテイル形を取っているが、動作が多回であるかは動詞の形とは関係がない。(i)は「ろくに休憩をとらなかった」と言ってもよい。

(i) さて、早朝出て、ろくに休憩も取らずに急げばその日のうちにチェンマイに着けるのだが（後略）。（やまだひろなが『面白いほどよくわかるタイ裏ワザの旅』）

ただし、(i)は回数ではなく、1 回の休憩時間が短いという解釈もありうるが、本稿ではそれを「休憩をとる回数が少ない」ことから派生したものとして見て、「ろくに」の意味解釈としての優位性が回数解釈より低いと考える。（スコータイから）チェンマイに行く途中で 1 回しか休憩をとらず、その一回の休憩の時間が短いという場合が普通想定しがたいからである。

動作が多回に行われる場合があるのに対して、動作が一回しか行われていないと思われる場合もある。この時、「ろくに…ない」はその動作を組み立てる下位動作の量が少ないという意味を表す。これを「動作量少」と略称する。典型的には発話現場で開始しそして終了するという短い時間帯に動作が行われたという文脈で観察される。

(14)　しかし、田代は、あいさつもろくにせず、あわただしく出ていった。
（松原惇子『OL 定年物語』）

(15)　この 2 体のロボットがろくに歩きもせず、せいぜい 3～4 歩くらいで肉弾戦をやっていたことを考えると、実際は百m以内の可能性が高そうだ。
（柳田理科雄『空想科学読本』）

(16)　このとき見ていて驚かされたのが、前述のように産道の出口をろくに見もせずにザクザクとハサミを入れていく医師の姿であった。
（定塚甫『医師の『人格障害』を疑う21のケース　現役精神科医が実名告発』）

(14)は田代の挨拶について、(15)はロボットの歩きについて、(16)は医師の出産の手術の仕方について述べている。いずれもその場で動作が終わり、動作の発生時間が短い。(14)は向こうが「おはようございます」を丁寧に言ったのに対して、田代は「ああ」などしか返さなかったというような場面が考えられる。「挨拶」を組み立てる具体的な動作を口から発せられた語で計ると、その量が少ない。「あいさつもろくにせず」は「「挨拶」を組み立てる語を発する」動作の量が少ないということである。このことは(15)がより明確に示している。「歩く」を組み立てる下位動作を歩数で計測できる。(15)はその量が想定より少なく、「せいぜい 3～4 歩くらい」しかないという意味である。(14)(15)に対して、(16)の「見る」はその下位動作が観察しにくい。「見る」という動作の量が少ないことは医師が産道の出口に目を向ける時間によって表されると考える。「ろくに見もせず」は医師が出産の手術をする時、見たり見なかったりして、産道の出口に注目する時間が少ないというふうに理解できる。

(14)(15)(16)は動作の量が同じ動作がくり返し発生することによるものというなら、(17)においては動作の量が複数の動作の継続発生による場合になる。

(17)　大急ぎで着替えをしたの、お化粧なんか、ろくにしなかったのよ。
（アガサ・クリスティー著／中村妙子訳『娘は娘』）

「化粧をする」ことはそれを組み立てる一連の下位動作の継続的な発生からなるものと思われる。「ろくに」と共起すれば、その一連の下位動作をすべて行うことができず、話し手の想定したほどにしていないという意味を表す。

動作が一回的な場合ではその動作がその場で終わり、発生期間が短いことが多いが、次の(18)のような、発生期間が長いが、その動作が一回しか行われていないと思われる場合もある。

(18) 僕は大学時代は少林寺拳法に夢中で、ろくに就職活動をしなかった。
（増田喜昭等『子どものスイッチ』）

普通、就職活動の持続時間は 1 年ぐらいで長いが、大学時代には就職活動が一回しかない。「ろくに就職活動をしなかった」は就職活動の具体的な内容（例えば、説明会を聞くとか、面接とか）をあまりしなかった、つまり就職活動を組み立てる下位動作の量が少なかったという意味である。

4.2.3 状態未達成

最後は「ろくに…ない」が「動詞の表す状態が話し手の想定に達していない」という意味を表す場合である。これを「状態未達成」と呼ぶことにする。修飾先は自動詞や自動詞句、あるいは動作動詞の受身形などある種の状態を表す動詞（句）の時にこの意味が典型的に観察される。

(19) 宿営設備もろくに整わない中での野宿だから、兵士たちはぶるぶると震えている。（富樫倫太郎『美姫血戦：松前パン屋事始異聞』）

(20) 貧しい階層では、手足がろくに伸びきらぬ幼さのうちから、一人前に働いて生計を立てねばならなかった。（樋口恵子『私の老い構え』）

(21) 医薬品でさえも、食事で取りきれないものの補助的な存在なのに、ろくにビタミンの配合されていない健康食品飲んでどうするんですか！体壊しますよ。（Yahoo!知恵袋）

(19)は宿営設備があまりない状態で野宿をしたため兵士たちが身を震わせているということである。(20)は貧しい階層の人達は手足がしっかり成長できていないうちに働かなければならないということである。(21)は健康食品のビタミン配合の状態につい

て述べている。いずれも対象（宿営設備、手足、ビタミン配合）の状態が話し手の想定よりはるかに下回っていることを「ろくに…ない」が表している。

以上、「ろくに…ない」が実際の文脈においては、修飾先の特徴に応じて三つの意味グループに分けられることを確認した。この三つの意味グループは「事態の内容が話し手の想定したところに達していない」という点で共通している。そのため、「ろくに…ない」は一つの基本義から出発して複数の発生義を発展させたという考え方が有効だと考える。

4.3 解釈優位と「ろくに」の極少性

修飾先の特徴や文脈環境によって「ろくに…ない」が三つの発生義を持ちうることは前述した通りであるが、「ろくに」が用いられた文はその意味が常に一つの解釈しかできないというわけではない。基本的にその三つの発生義の中のどれか一つに特定できるが、修飾先が可能形であり、或いは多回か一回かの区別が曖昧な場合、複数の解釈が可能になる。「ろくに…ない」の意味は解釈優位である。

(22)　おかあさんの顔をかくといったところで、三歳や四歳の子だ（なかには二歳の子もいる）。ろくにかけるはずがない。
（浜たかや『おばあちゃん宇宙へいく』）

(23)　経営難で動物にろくに餌をやれなくなった動物園からもらってきたのである。
（髙井有一『毎日新聞』）

(24)　上級将校に素性もろくに調べていない人間を採用するなんて、ジオンは滅ぶべくして滅んだと言えるでしょう。
（Yahoo!知恵袋）

可能文は概ね実現可能と潜在可能の二つに分けられる（渋谷 1993、高 2011）。「ろくに」が動詞の可能形と共起する時、基本的にその可能形で表された状態が話し手の想定したほどに達していないという状態未達成の意味になる。ただし、(22)のような動作主が動作を遂行する能力の有無を表す潜在可能の場合、「ろくに…ない」が使用されるとその意味は状態未達成が優先的に解釈され、動作未達成の解釈が難しいのに対して、(23)のような外部の条件の影響で動作が実現できなかったという実現可能の場合、渋谷（1993:15）でも実現系可能の場合、動詞の動作性が維持していると指摘しているように、動詞の動作性（(23）ではその回数性）も強く現れ、（外部条件の影響による）動作未達成という解釈も考えられる。さらに、(24)において、動作が複数回行われる

のが望まれるにもかかわらずその回数が少ないという解釈（動作回数少）も、動作が一回で行われるがその内容の一部しか為されていないという解釈も（動作量少）も可能である。この他に「ろくに寝ていない」は時間量少でも動作量少でも捉えられる。要するに、「ろくに…ない」の意味とその修飾先が一対一の関係ではなく、視点を変えれば別の解釈もありうるということである。

さて、2 節では「ろくに」が「十分に」や「満足に」とは完全に置き換えられないと述べたが、これは「ろくに（…ない）」は基本的には事態の内容が話し手の想定した基準よりだいぶ下にあり、ゼロに近いというのに対して、「十分に（…ない）」や「満足に（…ない）」は事態の内容が話し手が十分や満足だと思われるという基準に達していないということだけを表し、それが基準に接近していてもよいし、基準より下であってもよいためである。

(25)　おまえは今日ろくに（*十分に／*満足に）何も食べてないんだろ？
（アガサ・クリスティー著／加島祥造訳『死が最後にやってくる』）

(26)　(街灯は 10 か所あり、そのうちの 9 か所がいつも通りに灯っている時)
a. ??街灯もろくに灯っていない。
b. 街灯も十分に／満足に灯っていない。

例えば、(25)は相手が何も食べていないという文脈で「ろくに」が用いられている。相手の食べた量がゼロである。この場合の「ろくに」を「十分に」や「満足に」に置き換えると非文になる。また、(26)では、括弧内の背景では、(26a)はかなり不自然であるのに対して、10 か所全部灯れば話し手が十分だ、あるいは満足だと思われれば、(26b)が問題なく容認できる。この対照で見られた「ろくに」の意味的な特徴を「「ろくに」の極少性」と呼ぶことにする。

5. 「ろくに」の使用条件

本節では(1)が示した「ろくに」の使用条件の理由について検討する。

5.1 基本義から見た「ろくに」の特徴

4 節では「ろくに」の基本義は「事態の内容が話し手の想定したところに達している」というふうに規定できるということが明らかになった。この基本義から、「ろく

に」が使用された文は少なくとも次の二つの条件を満たさなければならないということが導かれる。

(27) a. 発話時には事態の状況が把握されている
b. 事態には少なくとも二つのあり方が存在しうる

「ろくに」は話し手が自身の想定した基準に参照しつつ、世界（実在の世界でも仮想の世界でもよい）に存在した事物、或いは発生した出来事などについて評価を下す行為の言語上の現れと言える。このことから、まず(27a)が考えられる。つまり、ある事態について評価を下す前に、その事態がどんな状況なのかを把握しなければならない。事態について何も知らなければ評価のしようがない。例えばマンションの住人の数に対して評価する際、まずはマンションにどれぐらいの住人がいるかを評価の主体が知る必要がある[5]。相手がどういうふうに挨拶をしたかをコメントする前に挨拶という動作が完了したと思われる必要がある。これを「事態の把握可能性条件」と呼ぶことにする。また(27b)は「ろくに」が現実の事態を話し手の想定と比較させているので、その事態は少なくとも実際の状態（あり方 1）と話し手の想定した状態（あり方 2）の二つのあり方が持たないといけないということである。事態が恒常的でいつでも変わらなければ、そのあり方が一つしか考えられない。その事態が話し手の想定したところに達しているかどうかは言えない。これを「事態のあり方条件」と呼ぶことにする。

以下、「ろくに」の使用が自然な文（以下「正文」）とその使用が容認されない文（以下「非文」）を取り上げてこの二つの条件を具体的に見る。

5.2 正文となる場合

「ろくに」の使用が自然である文は上述した二つの条件を支持する。

---

[5] 或いは、事態を把握するための参照情報があれば、話し手がその参照情報に基づいて事態を仮想的に把握し、その上で評価を下すことも可能である。次の文である。

(ii) 道路もなく、冬も寒いこの山奥には、ろくに住人がいないだろう。

(ii)は住人の数について事前に知っているわけではないが、話し手が「冬がとても寒い、かつ山奥というようなところには大体の場合住人が少ない」という一般的な知識から判断をしている。過去の経験や一般的な知識が参照情報として用いられ、事態を仮想的に把握している。

(28)　事実、昨年は酷い冷害で、村ではろくに食物もない有様でした。
（平野啓一郎『日蝕』）

(29)　指さされた女子工員の所に行ってその言葉を言うと、女は顔の色を赤く変えて、ろくに返事もしなかった。（岡松和夫『口紅』）

(30)　学校に言ってもママ、クラスは、荒れ放題、つまらいママし、ろくに授業も進みません。（Yahoo!知恵袋）

(28)(29)(30)はそれぞれ「数量未達成」、「動作未達成」と「状態未達成」の場合である。各用例が表す事態について、発話時点においてはその具体的な状況を話し手がすでに把握している。(28)と(29)は過去のことであり、去年この村は実際にどのくらいの食物があったか、また女子行員がどんな返事をしたかは発話時点ですでに発生したことであり、その具体的な内容は話し手（書き手）が分かっている。(30)は学校の授業の進み具合の一般的な状態を述べているが、話し手が過去から今までの授業に参加した経験に基づいてコメントをしているので、発話時点で学校の授業がどんな様子なのかも分かっている。修飾先の述語は(30)のような一定期間の状態が習慣を表す時のル形（「ない」の場合はそのままの形）もあるが、全体的には発生済みを表すタ形やテイル形が多用されていることもこの「事態把握可能性条件」を物語っている。

また、(28)(29)(30)はいずれの事態も複数のあり方を持っている。食物は天気などの影響で毎年その量が変わることが可能であり、むしろその方が普通である。「返事する」という動作は話し手の意志によって自由にコントロールできる。理論上「まったく返事しない」から「相手が嫌になるほど返事する」まで無数のあり方が考えられる。また、一般的に、授業の進み具合も常に一つのあり方（状態）しかないというわけではない。生徒や先生の様子、あるいは教室の設備の具合などによって随時変化している。これらの事態が場合によって話し手の想定した状態で出現したり、それ以外の状態で出現したりすることが考えられるので、「ろくに」による評価を可能にさせたと考える。

5.3 非文となる場合

「ろくに」の使用が容認されない場合は(27)の条件を満たさない。まず、発話時点においては事態の内容が把握できない場合、「ろくに」の使用が制限される。

(31) a. *明日、村はろくに電気がない。

b. *明日、彼はろくに挨拶しない。
c. *明日、彼はろくに役に立たない。

(31)は未来の事態について述べている。発話時点ではまだ起きていないので、事態がどういう状況なのかは知り得ない。そのため、事態の内容が話し手の想定に達しているかどうかも評価できない。(27a)の「事態の把握可能性条件」に違反している。

一方、事態の内容が恒常的であり、いつでもそのあり方が一つしか考えられない場合、あるいは事態の発生が随意的であり、人間の意志で制御できない場合、(27b)の条件に反していることになり、「ろくに」が使えなくなる。

(32) a. *地球が太陽の周りをろくに回らない。
b. *このコップはろくに割れない。
(33) a. *ろくに思わない（かった）。
b. *ろくに助からない（かった）。

(32a)は地球が太陽の周りを回ることについて、(32b)はコップが割れることについて「ろくに」で評価しようとしている。ただし、地球が太陽を回ることは人間の意志とは関係なく、両者の距離などによっていつも一定の速度で行われている。「このコップは割れない」というのは「このコップ」は「割れない」という性質を持つということである。二つの文とも事態のあり方が恒常的であり、変わらないのである。(33a)の「思う」という動詞は人間の偶発的で一時的な精神活動であり、「これから 10 分思いましょう」が言えないように、人間がその動作を自由にコントロールできない。(33b)の「助かる」も人や物が危険や負担に思われる状態から免れる状態を表し、話し手が想定したほどの「助かる状態」やそれに達していない「助かる状態」等がありえない。「助かる」が表す事態のあり方が「助かった」際の一つしか考えられない。

(27a)の条件の満たさない場合として未来時制の文を挙げ、(27b)の条件を満たさない場合として自動詞文を挙げている。しかし未来時制の文なら(27a)に違反し、自動詞文なら(27b)に違反して「ろくに」が使えないという必然性が常にあるわけではない。(27)はあくまで文脈の意味による制限である。例えば(34)と(35)では「ろくに」が問題なく使用される。

(34)　この様子だと、明日もろくに観客は来ないだろう。

(35)　コンセントの接続が悪いのか、扇風機がろくに回らない。

(34)は未来のことについて述べているが、話し手が現在の状況に基づいて明日の来客数を判断している。話し手が未来の状況について仮想的に把握している。(35)は自動詞の「回る」が使われているが、「扇風機が回る」ことは人がコンセントの接続をコントロールすることによって回り具合を調整することが可能である。そのため、事態のあり方が複数考えられ、「ろくに」が自然に使える。

「ろくに」が基本的には形容詞や名詞と共起しないことも(27b)で説明できる。形容詞は物の恒常的な性質や人の生理・心理属性を表すものである。そのあり方は普通一つしか考えられない。主体がいったん形容詞の表す状態を持ったら、すぐに他の状態に変更することができない。「この橋が長い」では橋の長さはいつでも変わらない[6]。名詞もずっと一つのあり方しか持たないので、「ろくに」に修飾されることがない。

最後に、「ろくに」は多くの場合、事態がもっと多く存在する、為される、或いは想定した状態に至る、といった期待の含意を含まれる。この含意によって「ろくに」がマイナス的な意味を表す述語とはあまり共起しないことが予想される。

(36) a. ?ろくに嫉妬しない。
　　b. ここでは魔術師は嫉妬すれば霊力が強くなるのに、彼はろくに嫉妬しない。

「嫉妬する」ことは主体がコントロールすることが可能であるが、「人に嫉妬する」ことが社会一般では良くないこととして見なされている。「もっと人に嫉妬してほしい」ということはあまりない。(36a)は不自然である。しかし、(36b)のように、「嫉妬する」ことが推奨されている文脈では「ろくに」の容認度が高くなる。語自体がマイナス的であるとしても文脈全体が話し手にとって望ましいのであれば、「ろくに」の使用制限が解消できると考えられる。

---

[6] この推論から、話し手の想定した程度であってほしいという文脈であれば、「ろくに」の許容度があがることが考えられる。例えば、形容詞の表す状態が人の動作で間接的にコントロールできる文脈である。

(iii)　普段通りの方法で作った（そして皆いつも美味しいと言ってくれていた）が、今日のケーキがろくに美味しくない。

(iii)は「ろくに美味しくない」だけの文に比べれば容認しやすいかもしれないが、コーパスではこのような例文がないので母語話者への調査が必要である。

6. おわりに

本稿ではコーパスから用例を採集して「ろくに」の意味とその使用条件を分析し、以下のことを確認した。

(37) 「ろくに」は「事態の内容が話し手の想定したところに達している」という基本義をもち、これが否定形式「ない」と呼応して、全体で「共起先の表す内容が話し手の想定したところに達していない」という意味になる。

具体的な使用場面においては、修飾先の述語の特徴に応じて「ろくに…ない」は「数量未達成」、「動作未達成」と「状態未達成」の三つの発生義を持たせる。この三つの発生義はお互いに排他的な関係ではない、文脈によっては「ろくに…ない」を複数の発生義で解釈することができる。

「ろくに」が使用される文は、①発話時には事態の状況が把握されているという事態の把握可能性条件と、②事態に少なくとも二つのあり方が想定しうるという事態のあり方条件、を満たす必要がある。「ろくに」は意味的には主体の期待性を含意するため、事態の内容が主体の望んでいるものでなければならない。

「ろくに」以外に、同じく話し手の想定に関わる副詞的な表現は「思うほど」「満足に」や「まとこに」などが挙げられるが、「ろくに」との関係の検討が今後の課題になる。

付記

本稿は、国際研究会議「第十二回漢日対比語言学研討会」（オンライン開催、2021 年 8 月 21、22 日）と「第 19 回 対照言語行動学研究会」（オンライン開催、2021 年 10 月 16 日）における口頭発表に基づくものである。発表の際は多くの有益なご質問、ご教示を賜った。記して謝意を表したい。

参考文献

影山太郎（2012）『属性叙述の世界』くろしお出版

北原博雄（2009）「動詞の語彙概念構造と「に」句のスケール構造に基づいた、着点構文と結果構文の平行性」小野尚之編『結果構文のタイポロジー』ひつじ書房. pp. 315-364

北原博雄（2013）「量修飾の可能性と、非修飾句のスケール構造の違いに基づいた、現代日本語の程度副詞の分類」『国語学研究』（52）. pp. 29-43

工藤真由美（1999）「否定と呼応する副詞をめぐって：実態調査から」『大阪大学文学部紀要』（39）. pp. 69-107

久山善正（1950）「「ろく」について」『国語研究』（6）. pp. 8-14

高恩淑（2011）「現代日本語における可能表現の意味分類について：実現可能性の在り処を基準に」『京都大学言語学研究』（30）. pp. 51-70

渋谷勝己（1993）『日本語可能表現の諸相と発展』『大阪大学文学部紀要』33（1）. pp. i-262

高見健一（2010）「否定極性への機能論的アプローチ」加藤泰彦等編『否定と言語理論』開拓社. pp. 357-377

仁田義雄（2002）『副詞的表現の諸相』くろしお出版

三原健一（2004）『アスペクト解釈と統語現象』松柏社

矢澤真人（2000）「副詞的修飾の諸相」仁田義雄等編（2000）『日本語の文法　文の骨格』岩波書店. pp. 187-233

辞書

北原保雄編（2021）『明鏡国語辞典　第三版』大修館

小学館国語辞典編集部（2002）『日本国語大辞典　第二版』小学館

新村出編（2018）『広辞苑　第七版』岩波書店

飛田良文・浅田秀子（1991）『現代形容詞用法辞典』東京堂

飛田良文・浅田秀子（1994）『現代副詞用法辞典』東京堂

松村明編（2019）『大辞林　第四版』三省堂

山田忠雄等編（2020）『新明解国語辞典　第八版』三省堂

用例出典

国立国語研究所：現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）

https://chunagon.ninjal.ac.jp/

ショウ　ギョウカン／人文学学位プログラム

（2022 年 11 月 11 日受理）